

〔日本釋名人中事〕ハナムケ 饒 たびにゆけば、のれる馬のはな、其かたにむくゆへに、たびだつ人に、物をおく  
るをはなむけと云、馬のはなむけと云、事、歌書に多し、馬を略してはなむけと云、

〔倭訓栞前編四〕うまのはなむけ 新撰字鏡に饒をよめり、饒は食にかゝり、驢は貨にかゝる、旅立  
人を送るとして、馬の鼻向の義也、今略してはなむけといへり、拾遺集に、せんと音にても、詞書に見  
えたり、門出を祝ひて、途中恙なからんために、道祖神に手向するなり、

〔倭訓栞前編二十四〕はなむけ 饒をいふ、歌書に多く、馬のはなむけといへり、旅立人の馬の鼻に  
向ひて、饒別するの意也、飲食に饒といひ、貨財に驢といふ、又代にてやるを程、儀などいへり、

〔拾遺和歌集別六〕天曆御時、御めのと肥前が、いでほのくにに、くだり侍けるに、せんたまひけるに、ふ  
ぢつぼより、さうぞく給ひけるに、そへられたりける、  
よみ人しらす○歌

〔古事記中景行〕倭建命○ 中 罷行之時、參入伊勢大御神宮、拜神朝廷、○ 中 罷時、倭比賣命、賜草那藝、劔、○ 那  
以音 亦賜御囊、而詔、若有急事、解茲囊口、  
後撰和歌集離九みちのくにへまかりける人に、火うちをつかはすとて、かきつけける、  
貫之

おりく、にうちてたく火の煙あらば心さすかを去のべとぞ思  
あひまゝりて侍ける人の、東のかたへまかりけるに、櫻のはなのかたに、ぬさをさしてつかは  
しける、  
よみ人しらす

あだ人のたむけにおれる櫻花あふさかまでは散ずもあらなん○ 中  
しもつけにまかりける女に、かゝみにそへてつかはしける、  
よみ人しらす

ふたご山ともにこえねどます鏡そこなる影をたぐへてぞやる、  
よみ人しらす